

他者と関わりながら、課題の解決に向かい

「問い」が生まれる授業

○授業（単元）終了後に「何ができるようになるか」
3つの資質・能力を念頭に授業をデザインしましょう

○教材で「何を学ぶか」

本時の学習目標を明確にしましょう

主体的に「問い」をもち、

自分なりの考えを持つ姿



やってみたい
調べてみたい
解決したい

他者との交流を通し、「問い」が生まれ

自分の考えを広げ深める姿



説明したい
質問したい
整理したい

学びの過程を振り返り、

新たな「問い」をもつ姿



もっと調べてみたい
～場面でもやってみたい
もっと考えたい

○多様な「子供一人一人の発達をどのように支援するか」

具体的な支援・手立て等を用意しましょう

単元・授業デザインMAP

～子供の3つの姿を目指して～

育成すべき資質・能力の三つの柱

知識・技能

（何を理解しているか、何ができるか）

思考力・判断力・表現力

（理解していること・できることをどう使うか）

学びに向かう力・人間性等

（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）

●準備

●導入

●展開

●終末

計画

めあて

見通し

発問

発信

まとめ

振り返り

評価・改善

●授業研究

板書・ノート・教具（ICT機器）等

○授業（単元）後「何が身についたのか」

評価・改善を繰り返しましょう

○円滑に「実施するために何が必要か」
ノート・板書・ICT機器等を工夫しましょう

○本時・単元は「どのように学ぶか」
3つの姿に着目しましょう

○計画……………学習指導要領解説 総則編P68参照
各教科等の目標と指導内容の関連を十分研究し、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、まとめ方などを工夫したり、内容の重要度や児童の学習の実態に応じてその教育課程の編成取扱いに軽重を加えたりして、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導を行うことができる配慮など。

○めあて……………問いサポP8参照
多様な生徒が、学習のねらい(目標)に迫れるように児童生徒のつぶやきを基にした表現や思考が焦点化できるとなるような内容など。

○評価・改善
……………学習指導要領解説 総則編P93・P105参照
「児童にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすることなど。

指導の過程における形成的評価などの評価の工夫など児童の実態や指導の場面に応じ、多方面にわたる対応が求められることなど。

○板書・ノート・教具(ICT等)
……………学習指導要領解説 総則編P105参照
教材・教具の工夫や開発、コンピュータ等の教育機器の活用や工夫など児童の実態や指導の場面に応じ、多方面にわたる対応を行うことなど。

○生徒指導の4つのポイント
……………生徒指導提要【改訂版】
自己指導能力の育成では、特別支援教育の観点も踏まえて①規範意識の醸成②自己存在感の感受③共感的な人間関係の育成④自己決定の場の提供に留意

○授業デザイン
……………学習指導要領解説 総則編P77参照
単元や題材など内容や時間のまとまり中で、見通し・振り返り・対話場面・考える場面・教える場面などをどのように構成するかという授業のデザインのこと。

○「何ができるようにするか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「子供一人一人の発達をどのように支援するか」「何が身に付いたのか」「実施するために何が必要か」……………学習指導要領解説 総則編P2参照
学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、改善するための6点の枠組みのこと。

○支持的な風土
……………学習指導要領解説 総則編P96参照
一人一人の児童にとって存在感を実感できる学級・規範意識の形成の為に、教師が毅然とした対応を行い規範意識を育成する学級
・相手の身になって考え、相手のよさを見付けようとする学級
・互いに協力し合い、自分の力を学級全体のために役に立てようとする学級

○育成すべき資質・能力の三つの柱
……………学習指導要領解説 総則編P3参照
知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理したもの。

○集団指導と個別指導の充実
……………生徒指導提要P14参照
集団指導を通して個を育成し、個の成長が集団を発展させるといふ相互作用により、児童生徒の力を最大限に伸ばすことができるという指導原理のこと。

(①成長を促す指導②予防的指導③課題解決的指導)

○人間関係や環境を整える
……………学習指導要領解説P141参照
言語環境の充実、整理整頓され掃除の行き届いた校舎や教室の整備、児童が親しみをもって接することのできる身近な動植物の飼育栽培、各種掲示物のある中で教師と児童生徒の良好な人間関係や児童生徒相互の豊かな人間関係がある環境のこと。

○「問い」……………問いサポP2参照
学習の過程で児童生徒の中から生じてくる疑問、問題意識、探究心など。

○振り返り……………問いサポP9参照
授業を通して、児童生徒に「何が分かるようになったのか」「どんな変容があったのか」「もっと考えたいこと」などについて自覚することなど。

○育成指標(沖縄県公立学校教員育成指標)
教育公務員特例法の一部の改正に伴い作成された、公立学校の校長及び教員の資質能力の向上に関する指標のこと。指標は、教員のキャリアステージに応じて、教員に求める4つの力(教職を支える力・生徒指導力・授業実践力・学校運営力)で整理されている。

○発信(力)
自分の意見をわかりやすく伝える(力) ※社会人基礎力
例. 英語では「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「書くこと」など。

○まとめ……………問いサポP8参照
授業終了における「まとめ」については、児童生徒が授業で何がわかったのか、何ができるようになったことなど。

子供の「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」の視点に立った授業デザイン

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の視点について

小学校学習指導要領解説総則編及び中学校学習指導要領解説総則編では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について、3つの視点に立った授業改善を行うことが示されています。この視点の具体的な内容を手掛かりに、「質の高い学び」を実現し、学習内容を深く理解することを通して、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが求められています。

「主体的・対話的で深い学び」の主語は「子供」

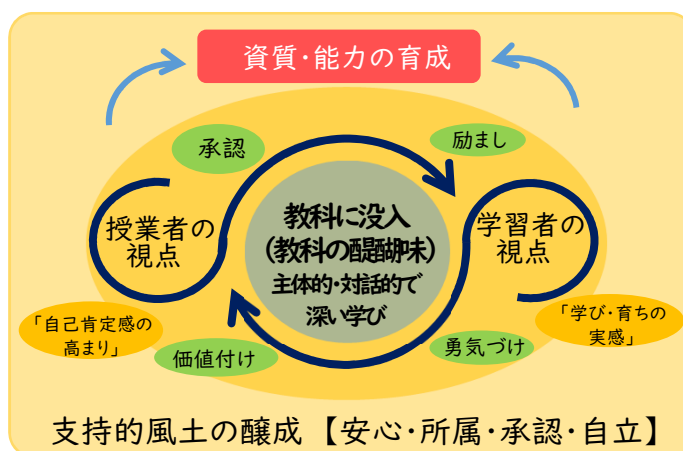
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善の主語は「子供＝学習者」となっています。学習者の視点に立ち、目指す資質・能力を育てるために、各教科等の学びを通して「何を学ぶか」という、必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶか」という、子供たちの具体的な学びの姿をイメージしながら単元や授業をデザインする必要があります。子供が「どのように学ぶか」の姿として示されたのが「主体的・対話的で深い学び」です。

授業改善を学習者の視点と授業者の視点から

本県では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「問い」が生まれる授業を提唱してきました。『問い』が生まれる授業サポートガイド及び補完版「授業改善ツール」においては、目指す子供の姿を実現する教師の働きかけの在り方について具体的に示されています。

例えば、子供の主体的な学びとして、授業の中では「子供が問題提示から課題に『気づき』そこから『問い』を生み出す」姿、「教科に没入していく」姿などがイメージできると思います。

そのような学びの姿を引き出すために授業者の視点と学習者の視点から、バランスよく「教科の醍醐味」について吟味する必要があります。教師が、事前の教材研究のプロセスで出会う教材のよさや感動・疑問などを、授業の中で子供たちにどのように出会わせたり、そのプロセスを共にたどり直すかという視点も大切です。



子供の学びのプロセスにフォーカス

「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」の視点から単元・授業デザインを考えると、子供の学びのプロセスにフォーカスすることが重要です。子供が「気づき」から「問い」を生み出し、その教科の見方・考え方を働かせ、解決すべき課題を自分や他者との間で吟味したり、再生を繰り返し解決に至るプロセスの子供の学びの姿や成長に目を向け、そのよさや可能性を認めたり、価値付けたり、励ましたりすることで、「自己肯定感の高まり」や「学び・育ちの実感」が伴った学びの自覚化が図られます。

単元などを見通した授業デザインへ

「主体的・対話的で深い学び」の実現は単元や題材等の内容や時間のまとまりを見通して、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかという観点で単元をどのように構成するかが大切です。

子供の「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」の視点に立った授業デザイン

子供たち自ら問題を発見し、「考えたいこと」を考え、試行錯誤を繰り返しながら協働的に学ぶプロセスを通して、子供たちの「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」を伴った学びをデザインすることが大切です。

子供の思考を促す教師の働きかけ(発問等)を生み出すためには、教材をどう吟味するか、「子供」が教材をどのように捉え、「子供」が学びをどう駆動するかの視点から授業をデザインしましょう。

授業前 教師も「問い」をもち、デザインを考えましょう

- 子供たちと考えることを笑顔で楽しむことをイメージしましょう。
- 目指す子供の姿をイメージしましょう。
- 「見方・考え方」を意識しましょう。(何に着目しますか。どう考えますか。)
- 子供たちの思い・願いに寄り添うようにしましょう。

導入 教材・あなたの笑顔との出会いを大切に

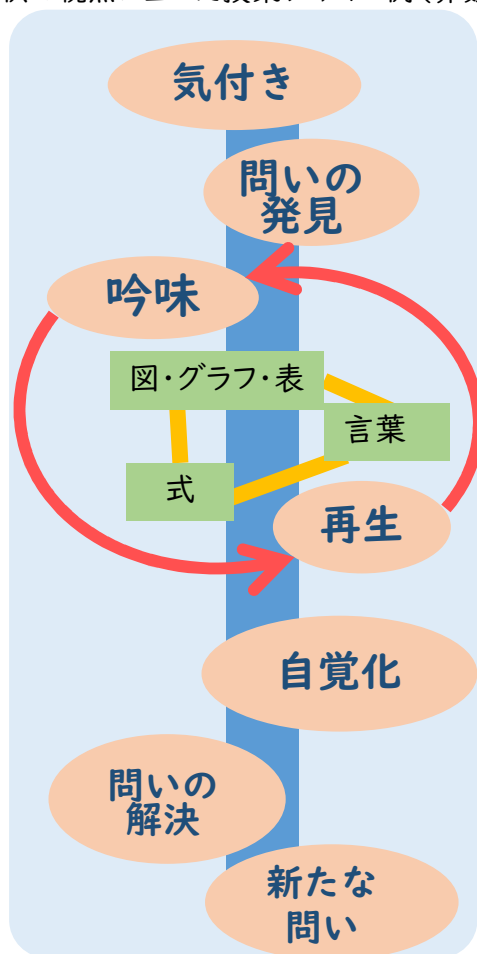
- 子供が「気づき」、そこから「問い」を生み出す
- 子供が自分なりの考えをもつ
- 子供が試行錯誤する
- 子供が生活経験や既習事項を関連付けられるようにしましょう

自己肯定感の高まり
学び・育ちの実感
の芽生え

子供の視点に立った授業デザイン例(算数)

展開 「何を解決すればいいのか」課題を焦点化

- 子供が「結果・解決」の見通しをもつ
- 子供が「何を、どのように考えているか」
- 子供が考えをどのように「つなげるか」
- 子供が活動の目的を明確にもつ
ペア・グループ
Outputによる思考の整理
Inputによる新たな気づき
- 「見方・考え方」に基づいた全体での交流
Outputによる思考の整理
Inputによる新たな気づき
子供が質問したり、立場を変えて考えたり



まとめ 「何があったから解決できた」自覚化

- 子供がどんな「見方・考え方」を働かせたかを自覚化
- 子供が自分や友達の考えのよさの自覚化
- 子供が自分の成長の自覚化
- 子供が「何ができて、何ができなかったか」
- 子供が新たな「問い」につながる気づき

自己肯定感の高まり
学び・育ちの実感